

2025・2026 年度 富山県の経済見通しについて

最新の経済情勢（2025 年 12 月 20 日時点）を織り込み、当財団が開発したマクロ計量モデル等を用いて、2025 年度、2026 年度の富山県の経済見通しについて分析を行ったので報告する。

2025 年度

富山県経済は、内需の回復が停滞する中で前年度比+0.5%

家計部門では、物価高騰による実質可処分所得の低迷が消費を下押ししているが、サービス消費を中心に底堅さもあり、民間最終消費支出は小幅のプラスとなる（前年度比+0.1%、寄与度+0.1%）。住宅投資は、2025 年 4 月施行の建築物省エネ法により省エネ基準への適合が義務化され、断熱性能向上や高性能設備導入に伴う建設コストの上昇から減少し、民間住宅はマイナス成長（-1.0%）となるものの、寄与度は-0.0%と全体への影響は限定的である。

企業部門では、高い投資意欲が維持され、民間企業設備は+2.0%、寄与度は+0.4%と成長率に大きく寄与している。公共投資や政府支出は、防災・インフラ関連を中心に底堅く、公需の寄与度は+0.2%となる。外需については、世界経済の減速に加え、2025 年に米国で導入されたトランプ関税が医薬品や非鉄金属、一般機械など富山県の主要輸出品に及ぶことで輸出が抑制され、移出入を含む外需等の寄与度は-0.2%とマイナスとなる。

その結果、2025 年度の富山県の実質経済成長率は、+0.5%のプラス成長を見込む。前回公表した経済見通し（2025 年 10 月 3 日公表）と比べると、物価高騰の長期化や設備投資の後ろ倒しを背景に民間最終消費支出や民間企業設備の想定は伸び悩んだ一方、トランプ関税の運用が当初想定より一部緩和されたことなどから外需等のマイナス幅が縮小し、成長率は+0.3%から+0.5%へと上方修正となった。

2026 年度

富山県経済は、内需の回復が遅れ前年度比+0.5%

家計部門では、実質可処分所得の低迷が続くものの、節約志向と一部での積極的な支出の二面性を伴いながら消費は持ち直し、民間最終消費支出は+0.5%、寄与度+0.2%と 2025 年度から改善する。住宅投資は、建築物省エネ法に基づく省エネ基準適合義務化による建設コストの高止まりなどからなお伸びを欠くが、民間住宅は+1.0%とプラスに転じ、寄与度は 0.0%と全体への影響は小さい。

企業部門では、人手不足感を背景に投資が冷え込む。公需は、防災・インフラ関連事業の平準化により伸びは落ち着くものの、寄与度は+0.2%と前年度並みの押し上げを続ける。外需等については、トランプ関税への価格転嫁や取引条件の見直し等、2025 年度に見られた輸出減の影響が和らぎ、寄与度は+0.1%へ改善し、県経済にわずかな押し上げ効果をもたらす。

その結果、2026 年度の富山県の実質経済成長率は、前年度比+0.5%とプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度は、民間最終消費支出、公需がそれぞれ+0.2%と内需がプラスに寄与する。

なお、今後の経済見通しにおけるリスク要因としては、以下を挙げることができる。

- ・ トランプ政権による関税政策の動向や米中貿易摩擦の再燃・長期化に伴う輸出環境の悪化。
- ・ 日中関係の悪化と東アジア情勢による対中貿易の変動。
- ・ ウクライナ情勢や中東情勢など地政学リスクを背景とした資源価格高騰や物価・為替レートの変動。

計数表

※ 表中の「前回」は 2025 年 10 月 3 日公表の経済見通し

	富山県（連鎖方式、2015 年基準）				【参考】全国（弊所推計）	
	2024 年度 （実績推計）	2025 年度 （実績見込み）		2026 年度 （見通し）	2025 年度 （実績見込み）	2026 年度 （見通し）
	今回	前回	今回	今回	今回	今回
実質県内総生産	0.6	0.3	0.5	0.5	1.0	1.3
（変化率（%）、括弧内は寄与度）						
民間最終消費 支出	-0.5 (-0.2)	0.2 (0.1)	0.1 (0.1)	0.5 (0.2)	1.6 (0.8)	2.0 (1.0)
民間住宅	1.0 (0.0)	-1.0 (-0.0)	-1.0 (-0.0)	1.0 (0.0)	-0.8 (-0.0)	1.5 (0.0)
民間企業設備	2.5 (0.5)	1.6 (0.3)	2.0 (0.4)	0.0 (0.0)	0.2 (0.0)	0.2 (0.0)
公需	(0.3)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.1)	(0.2)
外需等	(0.0)	(-0.3)	(-0.2)	(0.1)	(0.0)	(0.0)

（注 1）本見通しは、中部圏の経済見通し作成のためになされたものである。

（注 2）公需は、政府消費、公的固定資本形成の寄与度。

（注 3）外需等は、移輸出から移輸入を控除した移輸出（純）等の寄与度。

（注 4）端数処理の関係で合計が一致しないことがある。

【前提】

1. 暦年ベースでの世界・日本 GDP 成長率、円相場、原油輸入価格については、以下の前提を置いている。

	2025 年（暦年）		2026 年（暦年）
	前回	今回	今回
世界 GDP の実質成長率 （%）（うち日本）	3.0 (0.7)	3.2 (1.1)	3.1 (0.6)
実質実効為替レート	74.0	76.1	76.2
円/ドル	143.0	155.1	155.1
円/人民元	19.6	21.0	21.0
原油価格（ドル/バレル）	66.9	68.9	65.8

（注 1）世界・日本の GDP の実質成長率は、IMF 推計。

（注 2）実質実効為替レートは、米ドル、ユーロ、人民元等、対象となる全ての通貨との為替レートを、貿易額等で加重平均したもの（日銀算出）。翌年の為替レートについては、直近レートで一定と想定。

（注 3）原油価格は、ブレント原油価格に係る世銀推計。

計数表（北陸3県）

※ 表中の「前回」は2024年12月18日公表の経済見通し

	北陸3県（連鎖方式、2015年基準）				【参考】全国（弊所推計）	
	2024年度 （実績推計）	2025年度 （実績見込み）		2026年度 （見通し）	2025年度 （実績見込み）	2026年度 （見通し）
	今回	前回	今回	今回	今回	今回
実質域内総生産	1.3	0.9	0.4	0.9	1.0	1.3
（変化率（%）、括弧内は寄与度）						
民間最終消費 支出	-0.1 (-0.0)	1.0 (0.5)	0.4 (0.2)	0.4 (0.2)	1.6 (0.8)	2.0 (1.0)
民間住宅	0.7 (0.0)	0.0 (0.0)	-1.5 (-0.0)	0.8 (0.0)	-0.8 (-0.0)	1.5 (0.0)
民間企業設備	1.9 (0.4)	-0.2 (-0.0)	1.1 (0.2)	0.5 (0.1)	0.2 (0.0)	0.2 (0.0)
公需	(0.2)	(0.5)	(0.2)	(0.1)	(0.1)	(0.2)
外需等	(0.7)	(-0.0)	(-0.1)	(0.5)	(0.0)	(0.0)



Chubu Region Institute for Social and Economic Research

公益財団法人
中部圏社会経済研究所

本資料に関するお問い合わせは、事務局（代表 052-212-8790）までご連絡下さい。

公益財団法人中部圏社会経済研究所とは

当財団は、財団法人中部産業活性化センター、社団法人中部開発センター、財団法人中部空港調査会の3団体から理念と事業を継承し、中部圏である中部広域9県（富山・石川・福井・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀県）を事業エリアとする総合的・中立的な地域シンクタンクとして、経済統計分析および「広域計画」、「地域経営」、「産業振興」、「航空・空港」に関する調査研究などの事業を展開しています。

地域や時代のニーズに応え、地域社会の発展に貢献するため、調査研究能力を一層強化し、産学官の連携の中で、中部広域9県という事業エリアを意識して、調査研究をすすめ、広く社会に情報発信しております。

所在地等 〒460-0008

名古屋市中区栄四丁目14番2号 久屋パークビル3階

Tel (052)212-8790 Fax(052)212-8782

ホームページ:<https://www.criser.jp>

E-mail:criser@criser.jp